

被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード

風水害や火災にもスポット 宮古市災害資料伝承館

一般社団法人 邑サポートの奈良さんと伊藤さん

山元町立山下第二小学校

伝承ロードをゆく 第5回 宮城県名取市・仙台市宮城野区

福島県立博物館

時代担う子どもたちに継承 青森県八戸市

南三陸ハマーレ歌津

道の駅のだ ぱあぷる

ど根性ポプラ(大船渡市)

発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構





風水害や火災にもスポット

宮古市災害資料伝承館

宮古市の田老地区に宮古市災害資料伝承館が今年6月6日に開館しました。地震や津波はもちろん、風水害や火災など宮古市で発生した災害にスポットを当て、当時の様子を振り返るとともに教訓を伝える役割を担っています。

周囲の自然と調和した真新しい施設。向かって左側には旧田老村長などを務め、防潮堤の建造を立案した関口松太郎氏(1862～1937年)の胸像がある

宮古市災害資料伝承館は第3種類の震災伝承施設としては市内で6カ所目。近くには「津波遺構たろう観光ホテル」「田老防潮堤」の他、道の駅たろうの観光案内所であり田老地区の防災ガイドの受け付けを行う「たろう潮里ステーション」があります。田老地区に四つの施設が集中しているだけでも、震災伝承においてこの地がいかに重要な物語ります。

旧田老総合事務所の跡地に設置された同館は鉄骨造り平屋で延べ床面積422平方メートル。設置者は宮古市で、宮古観光文化交流協会が指定管理者です。「史実を伝え、災害の記録や記憶を風化させることなく次世代に伝える」をテーマに、市内の災害関係資料を収集保存、展示を通じて、伝承はもちろんのこと、災害に備え命を守る行動を考えるための拠点として整備されました。

津波の威力が分かる

館内には震災をはじめ、これまでに市内を襲った災害に関する資料130点ほどが展示されています。玄関を入るとすぐ目に入るのが、エントランスホールに置かれている震災の津波でねじ曲がった幅約3.5メートル、高

さ約1.2メートルの道路標識。津波の威力が一目で分かります。常設展示室には田老防潮堤の歴史や震災の被害、復興についてタペストリーやプロジェクションマッピング、映像コンテンツなどで分かりやすく紹介しています。地域の人や自衛隊、消防など、さまざまな視点でまとめられた証言からは震災の状況を感じることが出来ます。

多目的室では過去に市内で発生した風水害や大火などの資料を展示。震災の津波の様子を捉えた市内5地点の映像を見られる大型モニターもあります。今後は災害や防災について考えるワークショップを開くほか、企画展示も行う予定です。

開館は午前9時～午後5時で月曜と年末年始は休館(月曜が祝日の場合は翌開館日が休み)。入館無料。



多角的に防災、減災を考える

宮古市災害資料伝承館館長の高岩将洋さん

宮古市災害資料伝承館の館長に就いた高岩将洋さんは、指定管理者の宮古観光文化交流協会職員として、これまで市内の震災伝承やイベントの開催などの仕事を担ってきました。同館では地震や津波はもちろん、これまで市内で発生した山火事や風水害など大規模な災害にスポットを当てているのが特徴。「多角的な面で防災や減災を考えていけ

る施設にしていきたい」と語るます。

宮古市出身で高校卒業後に上京。東日本大震災の時は東京でスーパーパーのバイヤーをしていました。気がかりなのは古里の状況。2011年内に宮古市に戻ってきた時は「土ほこりが舞い、がれきもまだ残っている状況。街の面影はあるが、信じられない状況に言葉の失いました」。



防潮堤の歴史や被害を説明する展示の前に立つ高岩さん

震災翌年には宮古市に戻り、

高校生の頃、浄土ヶ浜で協会のアルバイトをしていたことをきっかけに、13年に入職。

「宮古は復旧・復興で多くの人の世話になりました。その恩返しは宮古の観光振興。祭りやイベント、震災伝承施設の見学などで足を運んでもらい、宮古が元に戻った姿を実感してもらえれば」と話します。

宮古市内にある第3分県の震災伝承施設の大半が、津波常襲地として知られる田老地区に設置されています。ただし震災遺構や建造物など無人施設もあり、展示見学に主軸を置いた施設として、同館の役割は田老地区の震災伝承において大きく期待されます。

他とのつながり生かす

高岩さんは「たろう潮里ステーションで行っている『学ぶ防災ガイド』や三陸鉄道の『震災学習列車』で立ち寄ってもらえるようになり、伝承館単体ではなく、つながりを生かし

入館すると震災の津波で被災した大きな道路標識が目につく



た施設を目指したい」と語ります。

同館は大型モニターやプロジェクションマッピングなど映像を用いたコーナーや被災物品の展示もありますが、パネルやタペストリーでの写真と文字による説明が多々あります。どれも貴重な内容で分かりやすくまとめているですが、見出しと写真を見るだけでもポイントを押さえてもらえるように工夫しています。読み物の展示については音声コード（ユニボイス）を付けて、スマートフォンアプリを通じて内容を聞けるように配慮しました。

今後は企画展やワークショップの開催などを計画しています。「例えば田老防潮堤からの避難体験や田老地区

震災関係者の証言が記されたタペストリーの前に、被災したさまざまな物品が並ぶ



の町歩きを楽しんでもらうなど、地区全体をフィールドとして捉え、復興ツーリズムにつながるような取り組みを進めていければ」と高岩さん。「次に災害があっても誰一人被害に遭わないためには、災害をよく理解してもらい、有事の際は自分の身を守るようにしたい。そのようなヒントを学ぶ施設にしたい」と強調します。

すでに学校の見学も相次いでいます。「震災を知らない世代には特に足を運んでほしい。大災害が起きたときのつらさや苦しみの一端に触れ、自分の大切な人が無事でいられるような対策を考えるきっかけにもらえたら」と期待を寄せます。

思いを
《発信》

人と人のつながり大切に活動

一般社団法人邑サポ^{ゆう}ートの奈良さんと伊藤さん

仮設住宅のコミュニティー支援から、まちづくりのサポートへ。支援の形が変わっても地域に根付いた活動は今も続いています。岩手県住田町の一般社団法人邑サポートは東京工業大学大学院で学んだ5人が運営。人と人のつながりを大切に、自然豊かな住田町のより良い地域づくりに尽くしています。

東日本大震災で甚大な被害を受けた大船渡市や陸前高田市の内陸側に接する住田町は、いち早く仮設住宅の建設を開始。木材産業が盛んな土地柄を生かし、全国に先駆けて木



「イコウェルすみた」の木の香りが残る展示棟で、震災時の支援などを紹介するパネルの前に立つ伊藤さんと奈良さん

同じ団地で生活するにはコミュニティの形成が大切。東京工業大学大学院でまちづくりやコミュニティデザインを学んだ3人が2011年7月、住田町で支援を始めたことが邑サポートの設立につながります。

その中の1人で法人代表理事の奈良朋彦さんは「当初は約3カ月の予定でしたが、長期支援が必要と考えました」と振り返ります。官公民協働の本格的な取り組みを開始。地元の公民館や町社会福祉協議会が中心となって、コミュニティの核となる自治会を立ち上げる支援を行い、邑サポートもその支援に携わりました。12年4月には大学院の後輩の伊藤美希子さんもメンバー入り。伊藤さんは「当初は東京から月3、4回通って活動しました」と話します。奈良さんも伊藤さんも今は町民として地域に根差しています。

伝承施設の案内も担当

町内の仮設住宅は20年3月に供用終了となりました。邑サポートは地域づくりの支援という形で活動を継続。町内5地区それぞれの拠点づくりで各公民館をベースに、その土地の実情や特徴を生かした地域活動を支援。高齢者が暮らしやすい地域の在り方を住民と一緒に考えたり、町内に暮らす外国人と町民との交流を図る機会を創出したりしています。

町では仮設住宅の部材を再利用し、仕事と学び複合施設「イコウェルすみた」を整備しました。仮設住宅1戸を再現した展示棟もあり第3分県の震災伝承施設となっています。震災時の後方支援に関する資料を展示し、奈良さんらは要望があればガイドを担当。町民との共生事業として山の広葉樹の種から苗を育て、山に



山に植樹する苗を「イコウェルすみた」で育成

植樹する「なえうえる」という活動にも取り組み、苗は同施設で育てています。「住田は人材豊富で教えてもらうことが多い。町民の皆さんが積極的に活動しており、私たちは地域の方々と共に歩みながらサポートするという形でこれからも貢献していきたい」と奈良さん。伊藤さんも「チャレンジを応援してくれる町であり、私たちもそれを支える立場。これまでのつながりを生かし、外から来る人たちとのコーディネートに努めたい」と話します。



仕事と学び複合施設「イコウェルすみた」展示棟
所在地／岩手県住田町世田米字本町31-2
TEL0192-47-5075(イコウェルすみた)

新校舎 震災復興のシンボル

山元町立山下第二小学校



木のぬくもりがあふれ、開放感もある校舎1階の図書広場前に立つ笑顔の5、6年生と武田校長

東日本大震災の津波で被災した宮城県の山元町立山下第二小学校は、復興新市街地のつばめの杜地区に再建され、2016年の夏休み明けから新校舎での授業が開始しました。震災後、地域の復興を願って始めた「山二小輪太鼓」や町内の震災伝承施設を利用した防災教育など、児童たちは元気に取り組んでいます。

新校舎は2階建てで町の復興のシンボル。被災した防潮林のマツを建材として活用した木造校舎で、17年にグッドデザイン賞を受賞しました。武田義弘校長は「震災後の本校の児童数は17年度の89人が最少。新市街地誕生で山元に戻った被災世帯や新規の転入世帯もあり、現在は137人です」と話します。

震災後、同校では6年生が新たな伝統として山二小輪太鼓を始め、運動会や町内行事で演奏を発表。4年生は地元で伝わる「花釜音頭」「笠浜甚句」といった民謡や踊りを学び、学習発表会で披露しています。

防災教育にも力を入れ、4

年生が昨年度まで防潮林植樹、本年度から植樹した木の保全に取り組む、5年生は山元町震災遺構中浜小学校、6年生は防災情報コーナーがある同町防災拠点・山下地域交流センターを見学しています。中浜小と防災情報コーナーは第3種類の震災伝承施設です。いずれも震災を機に、地元の歴史や学校の伝統を受け継ぎ、震災を風化させず防災意識の向上も図る取り組みです。

6年の橋本昊地さん、岩佐有清さん、阿部綾乃さん、秋葉悠臣さんは「中浜小を見学して津波の恐ろしさが分かりま

した。屋根裏の避難は怖かったと思います」と話します。防潮林を植樹した5年の菊地優斗さん、館屋花乃さん、菅野友加里さん、土生結仁さん、菊地愛結さん、關川結乃さん、寺嶋美月さんも「津波だけでなく、畑を塩害から守っていることを学びました。大きく成長した頃、見に行きたい」と楽しみにしています。

同校は町内の小・中学校とともに、能登半島地震の義援金寄付を2年連続で行いました。2年目は児童の発案で、学校近くのスーパで募金活動を実施。買い物に来た町民が快く応じてくれたほか、武田校長は「恩おくりプロジェクト」として行いました。恩を『かえす』のではなく『おくる』ことで能登に思いをはせれば。児童たちは震災の時は生まれていませんが、このような活動を通じ災害に目を向け、防災の在り方を胸に刻んでくれたら」と期待します。



6年生が力強く「山二小輪太鼓」の演奏を披露

3・11伝承ロード推進機構 震災伝承施設紀行

伝承ロードをゆく

第5回 宮城県名取市・仙台市宮城野区

取材／一般財団法人3・11伝承ロード推進機構 水口 早苗

青森、岩手、宮城、福島の4県でツーリズムや、映像アーカイブなどの活動を行っている3・11伝承ロード推進機構の職員が「震災伝承施設」を直接取材。「3・11伝承ロード」の意義と役割を改めて考えながら、東日本大震災の教訓と災害への備えを学びます。

経験者と教訓を共有

国内の空港として唯一、津波の被害を受けた仙台空港は、第2分類の震災伝承施設です。

1階にパネルを設置し、空港ターミナルビルには旅客や周辺住民、従業員など約1700人が避難した当時の状況とともに、2012年7月に全路線の再開を果たしたことなど被災の経験や復興までの歩みを日本語と英語で解説しています。

仙台国際空港株式会社管理部の相澤さんによると、飛行

機の待ち時間などに立ち寄って見ていく国内外の利用客の方が多く、津波高の表示を写真に撮っていく方々もいるそうです。

「被災時は偶然にも旅客機が地上にいない時間だったため死傷者がゼロだったことは奇跡でした。当時の経験と教訓は民営化後に加わったスタッフも経験者から教わって共有し、次の防災に生かしています」と相澤さんは話します。

同社では火災、防犯を想定した訓練に加え、津波に特化した避難訓練も関係機関と連携して毎年実施しています。

「震災伝承施設」とは？

東日本大震災の事実や記憶、経験を伝承する「3.11伝承ロード」を構成する施設で①震災の教訓が理解できるもの、②震災時の防災に貢献できるもの、③震災の恐怖や自然の畏怖を理解できるもの、④災害における歴史的・学術的価値があるもの、⑤その他、のいずれか1つ以上に該当することが条件。①～⑤1つ以上の条件を満たす施設を「第1分類」、加えて公共交通機関等の利便性が高かったり、近隣に駐車場があったりと、来訪者が訪問しやすい環境にある施設を「第2分類」、さらに案内員が配置されていたり、語り部活動が行われたりといった来訪者の理解しやすさに配慮している施設を「第3分類」としています。



- 1 仙台空港**
宮城県名取市下増田字南原
問／仙台国際空港株式会社
TEL022-383-4301
- 2 関上中学校遺族会 慰霊碑**
宮城県名取市関上西1-25
問／津波復興祈念資料館 関上の記憶
(名取市関上東3-5-1)
TEL022-738-9221
- 3 なかの伝承の丘**
宮城県仙台市宮城野区蒲生5-30
問／仙台市宮城野区地域力推進担当
TEL022-291-2111(内線6180)
- 4 蒲生なかの郷愁館**
宮城県仙台市宮城野区蒲生4-1-1
問／合同会社都のバイオマスエナジー
Eメールinfo@mm-energy.jp

東日本大震災が起こった当時、空港ビル2階の免税店に勤務していたという仙台国際空港株式会社管理部の小笠原さんに被災時の状況を伺いました。「経験したこと



のない揺れて商品が滝のように棚から崩れ落ちました。当時、津波対応の避難想定はなく皆で建物の外に避難し、しばらくして『津波がきた』と声が上がりました。津波は『波がひたひた来る』というイメージでしたが実際は『松林や住宅、車などの景色がそのまま迫ってきた』。あのときの破壊音は今も耳に残っています。売店の商品を食料として配給し、13日まで空港ビルで過ごしました。たいへんだったのはトイレ。夏だったら衛生面で別の被害が出ていたと思います。ラジオ以外情報が入らず、富山県から支援に来ていただいた高岡市消防の方から『もっと大変な所がある』と聞いて驚きました」と振り返ります。「被災しても復興はできる、ということも皆さんに知ってほしいと思います」。

未来の誰かのために

「関上中学校遺族会 慰霊碑」

は東日本大震災で犠牲になった名取市関上中学校の生徒14人の名前を刻んだ第2分類の震災伝承施設。13年に開校した新生関上中学校の目の前にある関上ブラザ敷地内にあり、誰でもいつでも立ち寄って、生徒たちの名前に触れられるようになっています。

「私たち親が死んだ後も、この慰霊碑は残ります。この石と子どもたちの名前が、中学校の後輩の皆さんや未来の誰かに教訓を伝え続けてくれると信じています」と語るのは慰霊碑を手がけた遺族会代表・丹野祐子さん。

慰霊碑を守る「社務所」として、また経験と教訓を後世に伝え、「津波のことは忘れても津波から学んだことは忘れずに」をスローガンに、「いのち」

の大切さを語ることができる場所として12年には「津波復興祈念資料館 関上の記憶」を開設しました。遺族会をはじめ有志とともに企業や学校、団体はもちろん希望する個人を対象に、慰霊碑などをガイドする震災学習プログラムを実施しています。

資料館併設のシアタールームでは被災時の状況とともに「関上の記憶」の活動を紹介する映像を上映。映像は定期的に撮り直し、最新の街の情報を盛り込んで更新していると

「津波」や「瓦礫」がどういふものかを知らない世代にも「目で見て分かる映像を目指しています。震災から14年が経ち、関上の街を歩いても当時のことがわかる風景はもう残っていません。街が変わり続けるからこそ私たちが伝え続けなければなりません」と丹野さん。

「被災地の方々にとっても他人事ではありません。子ども

地域の強い絆現在も

津波の被害を受け、閉校とな

った仙台南宮城野区の旧仙

台市立中野小学校跡地を訪ねました。「工業地帯の今の風景からは想像できないかもしれ

ませんが震災前、ここには四つの町内会があつて3000人もが住んでいました」と教えてくれたのは、かつての住民の一人で、なかの伝承の丘保存会会長を務める下山正夫さんです。「震災前、中野小学校や隣接する西原公園を会場に区民運動会や盆踊りなど地域を挙げた行事が盛大に行われ、住民たちは皆ほとんどが顔見知り。地域の拠点となる小学校は私

たちにとって特別な場所でした」と、振り返ります。

震災後、地域は災害危険区域に指定され「小学校だけは形として残したい」という住民たちの強い思いを受け、廃校になった小学校跡地に震災犠牲者への追悼と鎮魂の思い、地域の歴史を後世に伝えるモニメントとして造られたのが、第2分類の震災伝承施設「なかの伝承の丘」でした。

4町内会の役員を中心に構成された下山さんたち保存会のメンバー20人は、多くが中野小学校出身者。現在もボランティアで年4回の除草など

こまめな維持管理作業を続け、毎年3月第1日曜には慰霊祭も開いています。手入れの行き届いたなかの伝承の丘には今も多く

オープンの合わせ、震災で亡くなった人数「157」と、廃校になった小学校の創立年数「143」にちなんだ計300本のろうそくを灯し、追悼セレモニーも開かれました。

丘の目の前にある杜の都バイオマス発電所内には、震災前の中野小学校ゆかりの品々をはじめとする地域の歴史や、自然などを紹介する展示室「蒲生なかの郷愁館」が24年に完成。下山さんたちは、館内で25年6月から、かつての住民たちを集めた月1回の「お茶飲み」企画も始めました。

下山さんは「保存会の活動はこれまで男性が中心でしたが、お茶飲みで女性たちも親睦を深められるようにしたい。ここは元々、絆が強い地域。震災以降、ばらばらになってしまった人たちが再び交流できる場になれば」と、期待しています。



「慰霊碑の石は訪れた皆さんに直接触っていただけるように丸みのある形にしています。手を合わせる“お墓”ではありせん。ぜひ角がなくなるくらい触ってほしい」と丹野さん



震災伝承施設第3分類に登録されている「津波復興祈念資料館 関上の記憶」では被災した関上中ゆかりの資料を展示しています。「誰でも“あの日”を語れる場」として開放し、毎年3月11日には「追悼の集い」を開いています



蒲生なかの郷愁館の展示の中には、下山さんがPTA会長を務めていた当時制作に着手した小学校の小冊子「わたしたちの中野」を基にした地域の歴史を伝える年表も



なかの伝承の丘の標高は震災前の日和山と同じ6.05m。慰霊塔や中野小学校閉校記念碑などが整備されています

記憶を残す
明日のために

経験を後世に伝える「震災遺産」

福島県立博物館

福島県立博物館の総合展示室がこの春、一部を展示更新。「自然と人間」コーナーに同館が所蔵する「震災遺産」の展示が追加されました。展示を担当したのは「災害分野」担当学芸員の筑波匡介さん。ミュージアムエデュケーター、防災教育コーディネーターとしても活躍する筑波さんに話を伺いました。



主任学芸員の
筑波匡介さん

「自然と人間」コーナーは、福島県内の戦後のくらしの変遷を総合的に紹介する構成です。自然を切り開き、発展してきた高度経済成長、石炭から石油へとシフトしたエネルギー供給など産業の転換も紹介し、その一角に「東日本大震災」のゾーンが設置されています。

震災を「歴史」として位置づけ、経験と教訓を未来に伝えようと、同館が県内の資料館、研究会とともに保全プロジェクトを設立しました。2014年度から16年にかけて収集・調査・保全してきたのが「震災遺産」です。

「震災によって起きたこと」

を多様な視点で残していくため、震災に関わる「モノ」はもちろん新聞などの記事や個人撮影の写真、映像、語り部らの証言なども、さまざまな手法で収集。その数は2000件に上り、資料整理の作業が現在も続いています。

現在、常設展示室では、収蔵する震災遺産の中から震災当時の新聞記事や写真、「津波住宅案内図」といった一部の資料を展示。それぞれの資料を紹介する解説パネルの文章にも、細心の注意を払っていると言います。「震災遺産の多くは歴史の評価のいまだ固まっていない資料。避難している方々もまだいる状況下で、どのよ

うに紹介していくか今も慎重に模索しています」と筑波さんは話します。

想像し「追体験」

同館が所蔵する震災遺産は、筑波さんが県内外の小中学校、高校、大学で行っている防災教育でも役立てられています。

例えば、震災遺産の一つ、原発事故で突然、避難指示区域となった牧場に残されている

た「牛がかじった牛舎の柱」のレプリカです。「いつ牧場主が戻るのか分からない中で、繋がれたままの牛が餓死するまでかじり続けた柱を紹介し、自分なら牛をどうするのか、牧場の人たちがどんな思いで牛を置いて逃げたのか、そのような経験をされた牧場の方に自分ならどう声をかけるのか、皆で考える授業を行っています。震災遺産の資料から『経験』してなくても『想像』し『追体験』できる。そうした教育的効果を期待しています」と筑波さん。

福島県立博物館では26年2月13日～4月11日に特集展「震災遺産を考える」を開催。「ふくしまの経験」を共有し、東日本大震災を経験していない世代、未災地の人も防災を考えるきっかけとなる展示を目指しています。



避難所で使用された老眼鏡の展示に「あなには必要ですか?」と問うパネルを添え、一人ひとり避難所で必要とするものが違うことに気づき、今の来館者自身なら何が必要なのか考えるための工夫も



所在地／福島県会津若松市城東町1-25
TEL0242-28-6000

「自然と人間」コーナーの最後に設置された「東日本大震災」のゾーン

震災の教訓、次の災害に備える

時代担う子どもたちに継承 青森県八戸市



東日本大震災の直後、八戸市の観光名所として知られる無島の周辺を襲った大津波

青森県南の中心都市で太平洋に面し、日本有数の港町でもある八戸市は、東日本大震災で大きな地震と津波に襲われ、基幹産業の漁業・水産業施設や沿岸域の住宅地が深刻な被害を受けました。これを教訓に今後発生が懸念される日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震に備えた防災対策に力を入れるとともに、八戸市みなと体験学習館「みなつ知」を活用した震災伝承の取り組みを進めています。



お話を伺った方
熊谷雄一市長

業界は大打撃を受けました。

熊谷市長は「震災当時、私は青森県議会議員として復旧と支援の調整に当たりましたが、甚大な被害を前に言葉を失う思いでした。港に打ち上げられた漁船、津波に押し流された車や住宅の残骸、途方に暮れる市民の表情は今でも忘れられません」と振り返ります。

八戸市では震災半年後、被災地の社会基盤や経済を迅速に再建し、将来の災害にも強いまちづくりを目指す「八戸市復興計画」(計画期間10年)がスタート。「より強い、より元気な、より美しい八戸」を目指し、被災者への見舞金や一時入居住宅の提供、中小企業への復旧補助金など市民生活と地域産業の早期回復を図りました。八戸港も2年半で全ての施設を復旧させて港湾機能も強化した結果、コンテナ貨物の取扱量は震災前と比べ大幅アップ



中学生も参加して行われる防災訓練

2016年には津波被害を受けた多賀地区に津波避難機能付きの管理棟も設けた多目的運動場を整備しました。

熊谷市長は「人口減少が進む中でも市民が幸せを実感し、生き生きと暮らせる環境を整えることを念頭に置いています。防災・減災対策も重要な要素と位置付け、市民と連携しながら防災意識の向上や避難計画の共有、設備整備など、多角的な取り組みを推進していきます」と強調します。

教訓どう伝えるか

日本海溝・千島海溝沿いで発生が想定される巨大地震のリスクを受け、八戸市では23年度に「危機管理部」を設置。

被災直後の救助・救出活動や避難所運営は近隣住民や町内会の活躍が大きい。ため自主防災組織の設立にも力を入れ、今年5月末現在で組織数は84団体、組織率は91・7%と県内や全国平均を上回ります。

一方で年月の経過により震災の記憶が薄れ、防災意識の

低下も懸念されます。震災後に生まれた子どもたちは大規模災害を体験していません。市では毎年の総合防災訓練に加え、市内の小・中学校65校で年3回以上の避難訓練を実施。3月11日を「防災教育の日」と定め、非常食試食会や専門家による講座を通じて震災の教訓を伝え、防災意識の維持・向上に努めています。

八戸市では館鼻公園内の旧八戸測候所を改修し、湊地区の歴史・文化と震災の被害を伝える学習の場として2019年に同市みなと体験学習館「みなつ知」を開設。震災の実情や教訓を次世代に継承し、防災に貢献できる施設として青森県初の震災伝承施設(第3分類)の認定を受けました。災害時には指定避難所としての役割もあり、物資を備えています。

「震災や防災について学習でき、地域の歴史や文化も学べる場でもあるので、多くの方に足を運んでもらいたい」と熊谷市長。「小学校の遠足、見学会、学習発表会などで利用されており、次代を担う子どもたちに14年前の出来事を伝承し、防災意識も高まる契機になれば」と期待を寄せます。

「買い物難民」をつくらない 住民の心のよりどころに

南三陸ハマーレ歌津

東日本大震災の被災地にある復興商店街は、今でこそ観光スポットとしての役割も担っていますが、元々は被災した事業者の営業再建の場であり、地域住民にとっては日常の買い物場です。宮城県南三陸町歌津地区では他の被災地に先駆けて仮設商店街が開設。現在の「南三陸ハマーレ歌津」になってからも住民の暮らしを支えています。

北上山地の山々がリアス海岸のそばまで迫り、限られた土地で住民が生活やなりわいを営んできた歌津地区は、震災で大きな被害を受けました。震災の翌月には天皇、皇后現上皇、上皇ご両陛下が東北の被災地で初めて歌津地区をご訪問されました。

住民は避難所や仮設住宅での暮らしを余儀なくされましたが、復旧・復興が進むにつれ、生活の再建が急務でした。地元の事業主らが中心となり、仮設商店街の設置に乗り出し、食料品店や衣料品店、電気店

木のぬくもりが感じられる施設に現在、7店が入居している

など8店で2011年12月、「伊里前福幸商店街」として現在地にオープンしました。

震災があつた年内の仮設商店街の開業は、他の被災地に先駆けての取り組み。町内2カ所の復興商店街を設置、運営する「南三陸まちづくり未来」の職員で、歌津の商店街の事務所に常駐する坂下邦彦さんは「他地区への移動もままならない状況の中、商店主たちの『買い物難民をつくらない』という思いを形にした商店街がスタートしました」と振り返ります。

折に触れイベント開催

その後、常設施設の設置に



南三陸ハマーレ歌津を会場に多くの入出でにぎわう「歌津夏まつり」

向けての造成工事により、仮設商店街をいったん海寄りに移し、約7倍のかさ上げを施した現在地に建築家の隈研吾さんの設計による南三陸杉を用いた在来木造工法の温かみのある施設が完成。南三陸ハマーレ歌津と名称を改め、17年4月にオープンしました。

現在は仮設当初から続く店を中心に廃業や新規出店などを経て7店が入居。海の幸をふんだんに使った料理が味わえる食事処もあります。

同商店街は歌津地区の拠点であり、住民の心のよりどころです。同地区で事業を再開した商店メンバーが中心となり23年8月、伊里前流灯会が13年ぶりに復活。商店街からも望める伊里前湾に故人やかつての古里をしのぶ淡い光の列が浮かびました。商店街では他にも折に触れてイベントを開催。住民や復興に携わった関係者、観光客らでにぎわっています。

坂下さんは「各テナントは南

三陸まちづくり未来の株主でもあるので覚悟が違います。その点では一般の企業と同じ。集客力、収益力の向上に向け、皆で知恵を出し合いながら運営しています」と話します。



所在地／宮城県南三陸町歌津字伊里前100-4

第3分類（訪問しやすく、案内員の配置や語り部活動など、来訪者の理解のしやすさに配慮した施設）、第2分類（公共交通機関等の利便性が高い、近隣に有料または無料の駐車場があるなど、来訪者が訪問しやすい施設）のみ紹介。

- 第3分類 ●南三陸町東日本大震災伝承館 南三陸311メモリアル 南三陸町志津川字五日町200-1
●高野会館 南三陸町志津川字汐見町32-1
●海の見える命の森 南三陸町志津川字黒崎80、81
第2分類 ●南三陸町震災復興祈念公園 南三陸町志津川字中瀬町、字廻館前、字塩入、字汐見町地内



南三陸ハマーレ歌津では毎年、Jリーグのサポーターから選手のサイン入りフラッグを寄贈してもらっている(右が坂下さん)

野田ICそばに移転 村の観光ゲートに

道の駅のだばあふる

1992年の開業以来、三陸鉄道リアス線陸中野田駅に併設されていた道の駅が、2025年6月20日に三陸沿岸道路野田ICそばに移転オープンしました。名称はそのまま、以前より広くなった新しい施設にはキッチンサイトやレンタルスペースなども設けられ、村の観光ゲートであり、交流の場にもなっています。



新道の駅。「だばあふる」の名称は十府ヶ浦で見られる赤紫色の小石と、特産の山ブドウに由来

南部曲り家をほうふつとさせる大きな屋根が印象的な新道の駅は、物産直売所、フードホール、観光物産館「だばあふる」、名物「のだ塩ソフトクリーム」の販売所で構成。屋外にキャンピングカーサイトが4区画あり車中泊も可能で、休憩施設にはコインシャワーや授乳室も備えています。

レンタルスペース「自由工房」も併設。調理設備が整い、チャレンジショップや料理教室といったイベントに活用できます。

土地や建物は村が管理し、運営は村内でワイナリーや宿



野田村の特産品が並ぶ物産直売所。写真奥はフードホール

泊施設を営んでいる第三セクター「のだむら」が担っています。のだむら総務課長の小野匡紀さんは「自由工房はシェアキッチンとしても使える交流スペース。飲食店の開業を目指している方の利用も大歓迎です」と呼び掛けます。現在は平日午前6時半～8時に、地元住民が農家レストランを開き、朝食を販売。常連には住民も多くいます。

旧道の駅に震災時の写真

野田村で生まれ育った小野さんは東日本大震災の際、当時の勤務先がある久慈市で津波の第二波を目撃しました。

主要道路は寸断され、実家がある野田村へたどり着いたのは後日。三陸鉄道リアス線より内陸側にある村中心部の商店街や住宅街も津波被害を受け、変わり果てた光景が広がっていました。「海岸の防風林が中心部まで流れ込み、商店街や住宅街は壊滅状態でした」と説明します。



旧道の駅では現在も震災関連の写真を公開

新道の駅があるのは、海から少し離れた津波被害のなかった地域。震災後は災害公営住宅が建設され、集団移転先の住宅団地が誕生しました。

道の駅は避難所としての活用も想定され、物産直売所とフードホールは什器やテーブルを除くとフラットな大空間になります。災害対応の自販機、備蓄倉庫も設置。観光、交流、防災の機能を果たします。

小野さんは「震災前に比べて住宅が増えた地域にあります。三陸沿岸道路が全線開通したことで、青森や宮城といった隣県から訪れる方が増えました。地元の方にも観光客にも親しまれるように、野田村の魅力を発信していきます」と力を込めます。

旧道の駅には現在も震災被害、復興の様子を記録した写真や資料を展示。災害の脅威を伝えています。



所在地／岩手県九戸郡野田村大字野田25-3-1
TEL0194-78-4171

南三陸町・野田村の震災伝承施設

- 第3分類 ●野田村復興展示室 野田村大字野田第17地割107
- 第2分類 ●奇跡の東屋 野田村大字野田第18地割34-1 ●愛宕参道大鳥居 野田村大字野田第26地割16 ●役場前の被災時計 野田村大字野田第20地割14 ●東日本大震災大津波記念碑 野田村大字野田第10地割40 ●米田歩道橋の一部 野田村大字野田9-51-9 ●米田水門 野田村大字野田第9地割38-11 ●旧下安家地区応急仮設住宅 野田村大字玉川第2地割62-28

野田村

3.11伝承ロード推進機構 発足5周年記念 好評だったコンテンツ巡る 伝承ロードメモリアルツアー



時間	行程
8:30	【出発】JR仙台駅東口
9:30～40	【休憩】道の駅「上品の郷」
10:00～ 11:00	【見学】震災遺構大川小学校
11:30～ 12:00	【見学】出島大橋・出島
12:15～ 13:15	【昼食・お買い物】 シーバルピア女川
13:15～ 14:15	【座学】女川町まちなか交流館 【見学】震災遺構旧女川交番
15:00～ 15:30	【見学】 東松島市震災復興伝承館
15:30～ 16:00	【地域見学】東松島市野蒜周辺
17:00	【到着】JR仙台駅東口

※雨天決行



一般財団法人3.11伝承ロード推進機構が発足から昨年で5周年を迎えました。それまで100回近い企業・団体向けの研修会を行い、その中から好評だった被災地にある五つのコンテンツを集めた特別なメモリアルツアーを開催します。

バスで石巻方面へ移動。車内で機構の説明をはじめ、東日本大震災の被災状況の様子などを捉えたDVDを観賞した後、石巻市の震災遺構大川小学校を見学し大川伝承の会から話を聞きます。

その後、バスは女川町へ。昨年12月に開通した巨大なアーチ橋の出島大橋を経由して出島を巡ります。出島大橋からは透明度の高い穏やかな海や島々を見渡せる美しい光景が一望できます。町中心部のシーバルピア女川で海鮮を味わった後、女川町観光協会による同町の復興まちづくりの講話があります。

続いて東松島市に移動し、東日本大震災の伝承活動や防災教育に取り組む市民グループ「SAY'S(セイズ)東松島」の案内を受けながら、同市震災復興伝承館を見学。野蒜ヶ丘復興団地や復興整備で使われたベルトコンベア跡地下通路、震災時に津波からの避難場所として大きな役目を果たした「お佐藤山」も見学します。

震災の被災地、そして復興を体感できるプログラムにぜひご参加ください。

ご旅行実施日：2025年10月18日(土)

ご旅行代金：大人1万8000円、小学生9000円

※貸し切りバス代、昼食代、説明ガイド料、復興のまちづくりの座学、添乗員費用、土産が含まれます。未就学児は無料ですが、バスの座席、昼食、土産の用意はありません

最少催行人員：5人 定員：40人

旅行企画・実施／お申し込み・お問い合わせ：近畿日本ツーリスト株式会社仙台支店
TEL022-222-4141 FAX022-221-6188

表紙

被災地を歩く

津波に耐えた“長寿”の木

ど根性ポプラ (大船渡市浦浜地区緑地広場)

岩手県大船渡市三陸町越喜来地区はリアス海岸特有の深く入り込んだ湾に接し、これまでに何度も津波の被害に遭ってきた。三陸町の中心地として東日本大震災時は旅館や商店、資材倉庫が立ち並んでいたが、津波に襲われた地区は壊滅状態となった。

何度も襲来する津波に耐え抜いて残ったのが高さ約25mの「ど根性ポプラ」。元々、商店の敷地に立っていたもので、1933年の昭和三陸大津波以後に植樹されたという。震災のみならず60年のチリ地震津波の際も被災したが生き残った。

がれきばかりが広がったこの地区でぽつんと、それでもたくましくそびえ立つさまは、住民の心を慰めるとともに勇気を与え、「ど根性ポプラ」と呼ばれるようになった。被災地一帯はポプラ

を残し、広場として整備することが決まり、あずまや、トイレ、ベンチなどを設けた「浦浜地区緑地広場」が完成した。愛称は「ど根性ポプラ広場」。その名の通り、広場のほぼ中央に、シンボルともいえるポプラがそびえる。ポプラを含む広場全体が第2分類の震災伝承施設だ。

広場は歩きやすく整備され、のんびりと散策できる。ポプラの寿命は一般的に約60年といわれるが、ど根性ポプラは優に80年を超えているとみられ“長寿”の木でもある。

